

自分で現実を見に行くのがいちばん手っ取り早い

高野秀行『幻獣ムベンベを追え』

太古の昔からコンゴ奥地の湖に棲息するという謎の怪獣・モケーレ・ムベンベ発見を賭け、赤道直下の密林に挑んだ早稲田大学探検部11人の勇猛果敢、荒唐無稽、前途多難なジャングル・サバイバル78日。「買ってね、読んでね。……今の世の中には、絶対に、こういう本が必要なんです」(解説) 子供の心を忘れないあなたに贈る、痛快ノンフィクション。 (集英社文庫カバーより転載)

君はシュンクシタカラ湖を知っているか ——

北海道の湖で最後に発見されたという湖。一説によると人工衛星によって初めて発見されたというが、真偽のほどは定かではない。阿寒に在住の折、僕の探検心が疼いた。その湖面にカヌーを浮かべてやろうじゃないか。

釧路から阿寒町市街を抜け、心霊スポットで有名な雄別炭鉱跡手前、塩ラーメンが超絶に美味しい「真澄」(今はもうやっていない…涙)を越えてすぐのT字路脇にある「シュンクシタカラ湖はこちら」という小さな看板に従って左折。まもなく舗装はとぎれ、川沿いの細い砂利道をひたすら走って行く。当時僕の車にはナビはなかった。わざわざ湖の案内板があったのだから案内標識はあるだろうと高をくくっていたが、それが間違いだったことに後になって気付いた。それ以降、分かれ道があっても湖への案内を示す標識はなかったのだ。当然、携帯もつながらない。車がすれ違うのがやっとの道で、片側は崖だ。Uターンするのも難しい。引き返すならこの分岐だ。僕の弱気の虫が騒ぎ出す。南無三。記憶の片隅にあった湖の位置を頼りに左を選ぶ。これでいいのか。だめなら引き返せばよい。何度も自問自答しながら進んでいくと、視界が開けてきた。すると樹間から明るい光が差し込んで、その後方にちらちらと青く光るものが見える。シュンクシタカラ湖だ。実は、カヌーを浮かべるために湖畔までの道のりがまた一苦労だったのだが、それはここでは省くことにする。

とにかくカヌーを組み立て湖面に浮かべる。風もなく、日の光が気持ちよい。遠くに釣り人がいる。カヌーにあたる波音だけが聞こえる世界。ここにたどり着くまでのことを振り返ると、本当に人工衛星によって発見されたのじゃないかと思えてくる。ここから屈斜路湖も近い。クッシーがいるのなら、ここにも何か巨大生物がいてもおかしくないなあとと思えてくる。でも、ネーミングが難しい。シタカラでどうかな。想像は果てしなく広がるのであった。

ところで、巨大未知生物と言えばネス湖のネッシーが有名だが、アフリカの旧コンゴにあるテレ湖に生息するというムベンベを知っているだろうか？ 1980年代半ばにその探索を本気で実行した早稲田大探検部の記録が『幻獣ムベンベを追え』だ。まず国(コンゴ)の許可をもらい、現地住民の許可をもらい、テレ湖に到達するまでの苦労。論理だけでは通用しない世界の実態を知る。さらに40日に及ぶ24時間監視はもちろん、マラリアの恐怖に直面しながら、そこで食料を調達して生きていくことのなんと困難なことか！科学技術の脆さに反して人の強さが際立つ。

高野さんはコンゴ行きを決める際、ムベンベに関する資料を片っ端から翻訳し読んでいった。そうすると間違いなく怪獣が存在しているように思えてきた。そこで彼はこう思う。

(何事にも真実はあるはずだ。……本当のことを知りたいのなら) 自分で現実を見に行くのがいちばん手っ取り早い。

そして本当にコンゴに行ってしまうのだからとんでもない。作家の宮部みゆきさんが文庫解説に書いている。「普通、行かないぞ」。

でも、日常の世界から離れてみたいという探検心や冒険心は大切にしたいと思う。日常の有り難さを再確認したり、ドキドキワクワクを感じたりする意味でも。もちろん、コンゴまでは行かなくてもね。

